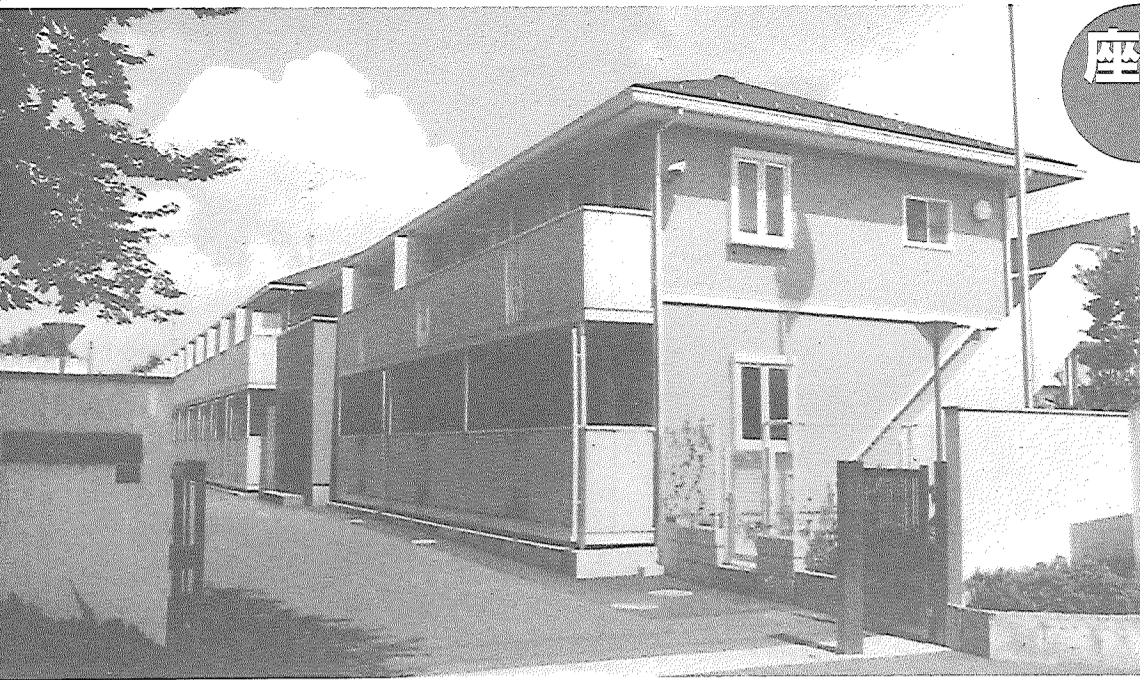


座談 創立百周年 金光教東京学生寮



東京に金光教の学生寮が誕生して、今年で百年を迎える。この間、寮生活を通して幾多の人材が輩出されてきた。そこには、次代（の金光教）を担っていく若者たちを育てていこうという強い願いが流れている。人材の育成が喫緊の課題とされる中、先人たちの人材育成に懸けた思いや、今日までの取り組みなどを、時代や教団状況に触れながら話し合ってもらった。

# 人材育成の願い、連綿と今に

時代の空気に触れ  
多様な価値観獲得

——東京に学生寮が設けられた意義とは何ですか。  
相賀 先人たちのこのお道への並々ならぬ思いがあったことを、強く感じますね。教団次世代の胎動期、金光教青年会の中心におられた畑徳三郎師をはじめ、信仰リーダーたちが、将来の金光教を担っていく人材の育成を願って、日本の中心である東京に学ぶ学生のための寄宿舎創設にまい進されました。上京してきた学生たちも、その願いを受け切っておられます。東京に出て勉学にいそしむついでに、信仰を養い、そこで得たものをもって、将来は道のために尽くす覚悟を持つておられました。そういう精神が受け継がれて、東京寮の百年の歴史が築かれてきたのだという気がしますね。  
和泉 東京という所は、時代の空気や国際的な動きが集約されますから、そういうところで勉学に励むことで、時代性とか社会性といった感覚が身のずと身に付き、後にお道の屋台骨を背負うような人材が育つていったのだと思いますね。勉強だけではなく、社会の動きや雰囲気にも触れ、広く人と出会うことも、人が育つていく上で重要な要素だったに違いありません。  
辻井 現在の学生寮は海外

の留学生を受け入れています。新寮を立ち上げた時から、留学生の受け入れが検討されていたんです。それは、東京学生寮の運営母体である布教興学基本財団（平成20年に解散し、現在の金光財団に引き継がれる）の公益性という面もある

りますが、それ以上に、学生にとって、国際感覚を磨くこと、多様な価値観が獲得できること、勉強のモチベーションが上がること、偏見や先入観が克服できるという四つのメリットが考えられていることだと思えます。実際、同じ屋根の下で寝食を共にする生活を通して、交流と相互理解が進みました。

## 先人の精神受け継いで百年

### 勉学通し得たもので道に尽くす

相賀 正実先生 あいが・まさみ／金光教東京寮寮友会事務局長、昭和56年卒業



和泉 これからは、グローバルな価値観の中で一人ひとりの人間性や考え方が問われます。そうした現在、東京学生寮が留学生を受け入れていることは、大きな意味では文化に寄与する活動だと思えますね。金光教の物の考え方や価値観がじわりじわりと伝わっていく活動ととらえることができるのではないのでしょうか。金光教の人材育成とは、そういう息の長いものではないかと思うのです。そうした経験を持った若者が将来、どのように世界を、また金光教を担っていくのか、楽しみどころです。

### 教団発展期の若者 信心で社会導く志

——時代の変遷の中で、寮生の意識も変わってきたのでは。

相賀 私たちの年代あたりから、教師子弟の中にお道の教師にならずに、世の中に出て働く人が際立って増えていったように感じます。そうした人たちも、この道のお役に立ちたいという思いは持っていて、信心と縁が切れたわけではありませんが、いったん世の中に出ると、教会に戻るのが難しくなるという現実はあると思えます。  
辻井 学生の気質は時代によって明らかに変わっています。私が在寮したころと比べても、今の学生は安定志向というか、個人主義の傾向が一段と強まっています。私は平成3年に寮監になりましたが、就任当初は自主性や自発性が大事だと考え、月例祭など寮行事への参加を強制するようなことは言わないようにして



## 育成には種々の働きが必要

### 寮生への信仰的アプローチ課題

辻井 篤生先生 つじい・あつお／金光教東京学生寮寮監、昭和56年卒業

いました。でも、最近の学生は本音を言わず、その場が堅苦しい空気にならないように受けの良い軽い話や面白い話題しか口にしません。そういうしているうちに、寮が学生アパートのようになっていきました。これではいけないと思い、機

会あることのできるだけ信心の話題を振り向け、行事への積極参加を呼び掛けるよう心掛けています。  
相賀 今とはまた違った意味で、大正時代にも自由に任せていく中で、どつと崩れた時期があったようです。大正デモクラシーを背景に自由主義的風潮が強まる中で、当時の若者もその影響を少なからず受けました。それは本教の青年も例外ではなく、墮落ということが問題にされています。多感な年代における人格形成には、信仰的な指導をする人の存在がとりわけ大切な要素になっています。私が在寮した時代は、中山亀太郎先生が寮監としていてくださいました。先生が何かおっしゃることはあまりありませんでしたが、そのお姿を通して無形の薫陶を受けました。  
和泉 信心と青年について考える時、教団の発展期には東京でも青年会活動がかなり活発で、金光大神（教祖）のご信心に触れ、感銘を受けた若者たちの中には、時代社会に訴えかけていく者もありました。  
教祖を知らない若い世代による辻（つじ）説法のようなことも盛んに行われませんが、そこには、自らが金光大神の信心をするだけでなく、その信仰を持って社会へ出、広く社会を善導していくという志があった

明治43年、時の教監 佐藤範雄師や青年

会長だった畑徳三郎師の努力で、東京牛込(現在の新宿区)に「金光教青年会寄宿舍」として開舎した。

昭和20年の東京大空襲で建物を焼失。昭和23年、埼玉県川口市に再建された。

その後、昭和34年に鉄筋3階建ての寮が東京都小金井市に建設され、平成3年には同建物の老朽化により、同所に東京学生寮建物が新築された。



開舎翌年の女関前にて。前列中央が畑徳三郎師(明治44年晩秋)

▲中山亀太郎師(小金井市の旧東京寮建物の玄関先で) ▼牛込の青年会寄宿舍全景。左は記念館(昭和5年頃)



寮

創設以来これまでに、延べ9百人近い寮生を世に送り出し、その中から数多くの人が道の教師となったほか、社会的にも中川仲蔵氏(元・日軽金属会長)や朝田静夫氏(元・日航社長)、作家の小川洋子氏などの人材を輩出している。

現在の教務総長をはじめ、歴代教監にも寮の出身者は少なくない。

創立100周年 開寮記念祭

日時/4月17日(土) 場所/金光教東京学生寮

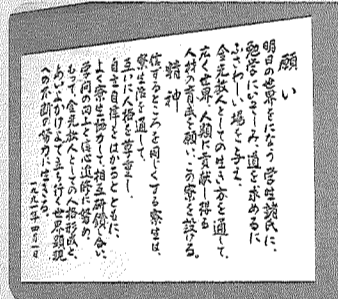
詳しくは金光教東京学生寮 (TEL 042-326-0444) まで

綱領

信ずる所を同うし期する所一なるが故に、此舎を設け此舎に入る。茲に在る者は皆斯教の本旨を体し模範的の金光教徒たることを志とす。

されば信心の純正高潔にして堅固熾烈なること、性格の寛雅弘毅にして深遠周密なること、今日一日眼にし耳にする誰人にも優らん事は其の願ひなり。

故に苟も事に処するに全霊全魂を打出して語り又行い、軽佻浮薄なる何物にも己が第一義とする所を従えざるは其今月今日の覚悟とする所なり。



東京学生寮には現在、「綱領」の精神と文言を今日の「願ひ」に表現し直した、「願ひ・精神」が掲げられている

と思うんですね。

最近でも、寮生の中に東京平和集会などへの参加をきっかけにして、平和や社会活動に関心を示す人があります。「何かしなければ」という思いは、時代を問わず、青年特有の情熱のほとばしりのようなものだと思いますね。

相賀 寮の発足当初は、寮監のような方はいりませんでした。寮の綱領(右掲)が掲げられました。この原案を作ったのは、後に教団の信仰リーダーとなる、当時二十代だった高橋正雄先生です。

東京に学び集う青年の志の表現として、自らを律するような文面と、ここからの生き方の指針ともなる精神性を有した、とても格調高い文言ですね。

教祖の手習い経験 物事の考え方養う

本教には学徳という言葉がありますね。和泉 教祖様は十代のころ、

庄屋の小野光右衛門さんの下で手習いをされました。この経験は、教祖様の人生にとって大変貴重なものでした。ここで教祖様は、物事の見方やその因果関係などを学んでいかれたのではないかと思います。

後年、教祖様はご自身のそれまでの歩みを振り返りながら、「御覚書」を記されていますが、自身の生き方を問い返しつつ、その時々々の事柄の意味を神様との関係から確認しておられるのだと思います。いつの時代にも、自分の歩んできた道筋を見詰め、進むべき方向を見定めていくことはとても大切なことだと思います。

相賀 教団の組織化と本教信仰に基づく学校づくりに多大な貢献をなした佐藤範雄先生がまだ青年だった時、教祖様から「この方は神徳は受けても学徳がない。その方は神徳と学徳とを得てくれ」というお言葉を頂かれました。佐藤先生

は学徳ということ、学問をすることを得たものをもつて道を現す働きをせよというふうを受け取っておられる。教祖様は足かけ二年しか手習いされませんでした。この経験は、佐藤先生へのこのご理解へとつながっているように思います。

辻井 人材の育成は、いろいろな働きによってなされていきます。その時には関連性はないように思われても、長い目で見た時、それらが思わぬところがかかわり合い、大きな働きとなっていくことがあります。東



ご神縁得た若者の経験の場

人と出会い切磋琢磨の機会要る

和泉 正一先生 一般財団法人 金光財団代表理事、金光教布教部長

京寮の今日までの百年を考えてみても、どこで切れていても不思議ではありませんでした。事実、そうした局面が何度もあったことを思うにつけ、人間の考えや力ではない、ご神慮とでもいうほかならないものを感じますね。

和泉 そういう意味では、教師以前の若者に手を差し伸べ集約する役割を、東京寮は結果的に担ってきたといえますね。東京寮という、人と人が出会い切磋琢磨(せつさたくま)する場があることで、この道にご神縁を得た若者がいろいろの経験をしていくことができた。そして、そうした事柄を通して、信仰的な視点や連帯感がそれぞれの心の中にはぐくまれていって、今日までつながってきたのだと思います。百年の歴史の中で、ある人は教会の現場に立ち、またある人は信仰を持って社会へと果立っていききました。どうい

道を進むかはそれぞれですが、東京寮には全教の願いが懸けられていることを、忘れないようにしてほしいと思います。 若者は絶対に参加しませんが、それは、現在の寮の行事でも同じです。 相賀 少なくとも、この道の育成はこれまで、まず家庭なり日常の中で土台となるものが培われ、その上にいろいろの活動があつて効果を挙げてきたと思うんです。ところが今日では、その足場となるべきところが大きく衰退しています。また、そうした現状に対する分析も、具体的な育成方法も十分に講じられていないと思います。 和泉 昭和時代には、教監、理事の多くが東京寮の出身者でした。でも、あらかじめそうなることを想定したり期待されていたという点ではありません。結果的にそうなったということです。人材の育成はすぐにはありませんし、時代によってその現れ方も一様ではありません。 人が育ち、道のお役に立つということには、人や場、祈りと時間が必要で、長い目で見ていかなければなりません。結果が出ない場合だつてあるかもしれない。そこまで覚悟して全教挙げて掛からないと、人材の育成はできないと思

信心への関心喚起 全教挙げて取組を

寮の今後の課題とは。 辻井 卒業した人たちへの手だてをどうするかということ、在寮生への信仰的なアプローチをどのようにしていくかです。以前、金光教学生会の会長が寮にやってきました。活動への参加を呼び掛けたことがありました。この時、寮生から何のためにやるのかを問われ、それにはつきり答えられなかったんです。何のためかを明確に言えなかったら、

す。